

芹生谷遺跡Ⅴ

平成27年10月

大阪府教育委員会

芹生谷遺跡 V

大阪府教育委員会

序 文

芹生谷遺跡は大阪府の南東部、南河内郡河南町芹生谷、中に所在する古墳時代から中世に至る集落遺跡です。遺跡は東に葛城山系をのぞみ、周辺に田園が広がるのどかな風景が今なお残されています。

近年、このような田園を東西に貫く国道309号が開通し、これに取り付く南北道路として、国道309号河南赤阪バイパス道路の整備工事が始まりました。工事に先立ち、本府教育委員会では平成19年から継続的に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、古墳時代後期の竪穴住居や中世の掘立柱建物などを検出しました。

平成26年度の調査は、現在も河南台地の重要な灌漑水路であり、調査地の東側を流れる「大島水路」の原点を発見することを目的としていました。今回の調査では水路は発見できませんでしたが、調査区と金山古墳の間には基幹水路のひとつがあったと推定しています。

芹生谷遺跡の発掘調査も平成26年度で終了することになりましたが、本調査の実施にあたっては、地元の方々や、大阪府都市整備部をはじめとする関係各位に、多大なご協力を賜りました。深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年10月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 星住 哲二

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した一般国道309号河南赤阪バイパス道路整備工事に伴う、河南町芹生谷、中所在、芹生谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査の調査番号は、14008である。
3. 現地調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査西川寿勝を担当者とし、平成26年12月1日から平成27年1月30日まで実施し、引き続き遺物整理作業を調査管理グループ主査小浜成、副主査藤田道子を担当者とし、実施した。
4. 出土遺物・記録資料などは、本府教育委員会において保存・管理している。
5. 検出遺構の写真撮影および、本書の執筆・編集は、西川寿勝が担当した。
6. 出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 発掘調査・遺物整理および、本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。
8. 本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、356円である。

本文目次

序文・例言

本文目次・挿図目次・図版目次

| | |
|-----------------|----|
| 第Ⅰ章 位置と環境 | 1 |
| 第1節 位置と環境 | |
| 第2節 調査経緯 | |
| 第3節 調査方法 | |
| 第4節 層序 | |
| 第Ⅱ章 調査成果 | 7 |
| 第1節 26-1区の調査 | |
| 第2節 26-2区の調査 | |
| 第3節 26-3区の調査 | |
| 第4節 出土遺物 | |
| 第Ⅲ章 まとめ | 11 |

図版
報告書抄録・奥付

挿図目次

| | |
|----------------------|----|
| 図1 周辺遺跡分布図 | 2 |
| 図2 調査区位置図 | 3 |
| 図3 調査区地区割図 | 4 |
| 図4 調査区と段丘・水路 | 6 |
| 図5 26-1区・26-2区 | 8 |
| 図6 26-3区 | 10 |
| 図7 25-2区の溝2-2 | 12 |

図版目次

巻頭図版 金山古墳と道路予定地

| | |
|--------------|--|
| 図版1 全景 | |
| 図版2 26-1区全景1 | |
| 図版3 26-1区全景2 | |
| 図版4 26-2区全景1 | |
| 図版5 26-2区全景2 | |
| 図版6 26-3区全景1 | |
| 図版7 26-3区全景2 | |
| 図版8 出土遺物 | |

第I章 位置と環境

第1節 位置と環境

河南町は、大阪府の南東部に位置し、町域は、東西6.7km、南北7.5km、面積は約25km²である。北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村と接し、東は金剛山地の稜線で奈良県葛城市と御所市に接する。葛城・金剛に連なる山地部とその西側に広がる河南台地からなる。

河南台地周辺には数多くの集落遺跡や古墳が分布する(図1)。また、金剛山の北麓にかけては南北朝期に楠木一族が拠点とした山城が数多く営まれている。これらや芹生谷遺跡の位置づけ、残された史料の評価は既刊の報告書に詳述されている。参照されたい。

第2節 調査経緯

一般国道309号の延伸が河南台地に及び、本府教育委員会で平成14年に試掘調査を実施した。このときは芹生谷遺跡の北側部分で大きな谷状の落ち込みがみられ、遺構・遺物の確認はできなかった。平成17年、遺跡地周辺で暫定的に二車線のみ309号が開通すると、その南側で南北800mにわたり、幅員21mの河南赤阪バイパス整備事業が計画された。これをうけて、平成19年に試掘調査を実施し、全域で遺物の広がりを確認、以降継続的に発掘調査を実施している。これまでに調査の総計は10000m²に及ぶ。その結果、古墳時代後期の建物群、飛鳥時代の水路、南北朝時代の掘立柱建物などを検出している(図2)。今回調査は河南赤阪バイパス整備事業にかかわる発掘調査の最終にあたる。

今回の現地調査(平成26年度)は平成26年12月1日より実施、翌年1月30日に終了した。遺物整理作業と本書の作成は現地調査と併行して開始し、平成27年7月末に終了した。調査区は調査順に1区～3区に分けた。1区は当初の工事計画で埋め立て保存される谷部分であったが、道路建設に伴って、既存の農業用水路の切り替えが必要となったこと、および2区・3区も当初設計は盛り土であったものが切り土に変更されたため、協議の結果、発掘調査することとなった。1区・2区の南側は21-4区、2区と3区の間は21-5区として、平成21年度に調査されている。

第3節 調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行1/10000地形図を基準として4段階の区分による地区割を実施している(図3)。第I区画は南西隅を基準として縦軸をA～O、横軸を0～8に区画する。芹生谷遺跡は河南町の南端に位置するD6区内にある。第II区画は第I区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。今回調査地は11区にあたる。第III区画は第II区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。今回調査地は1C区・1D区内にある。第IV区画は第III区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa～j、横軸を1～10に区分したものである。今回調査区の北端はD6-11-1C-5d、南端はD6-11-1D-5fである。

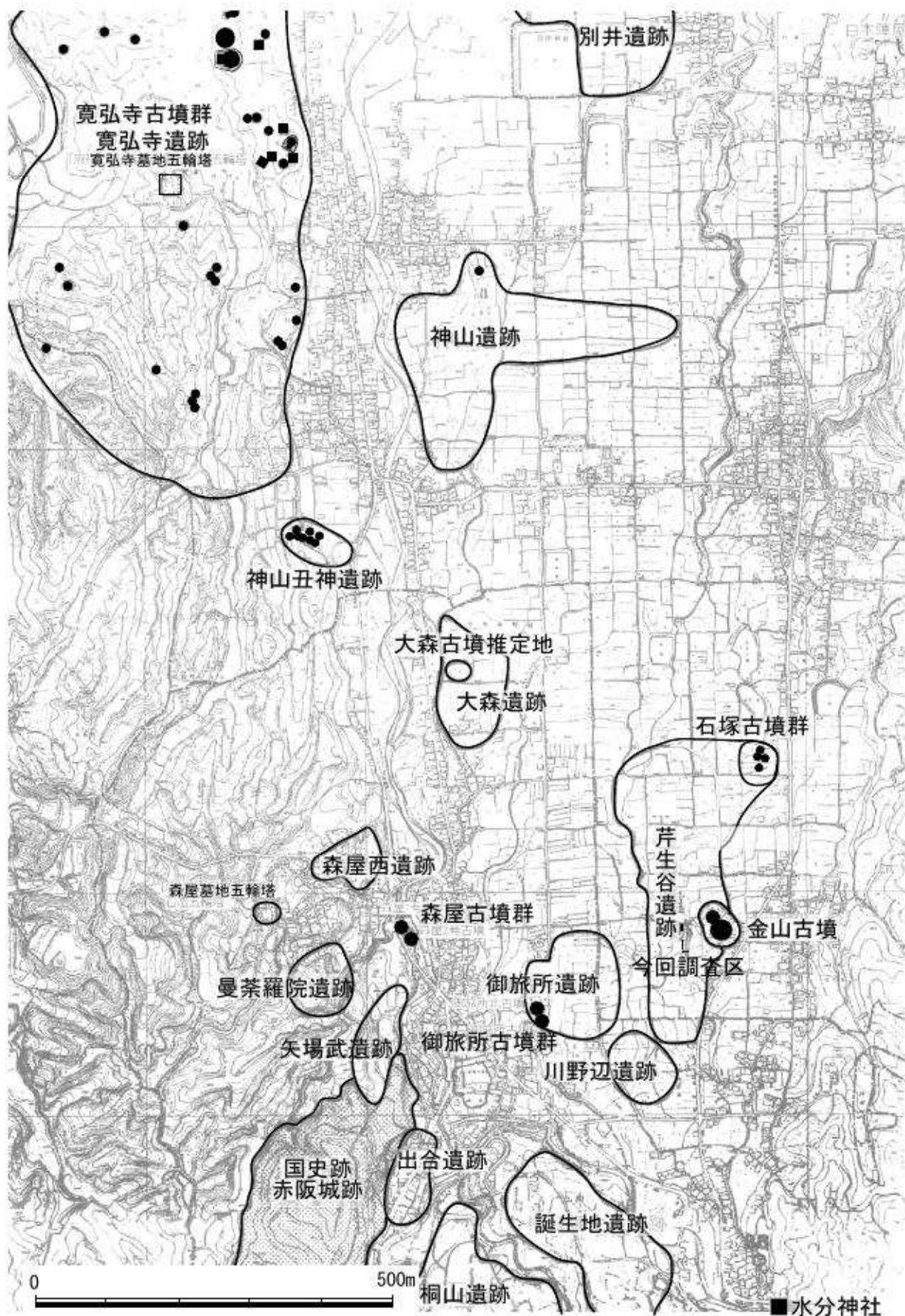


図1 周辺遺跡分布図

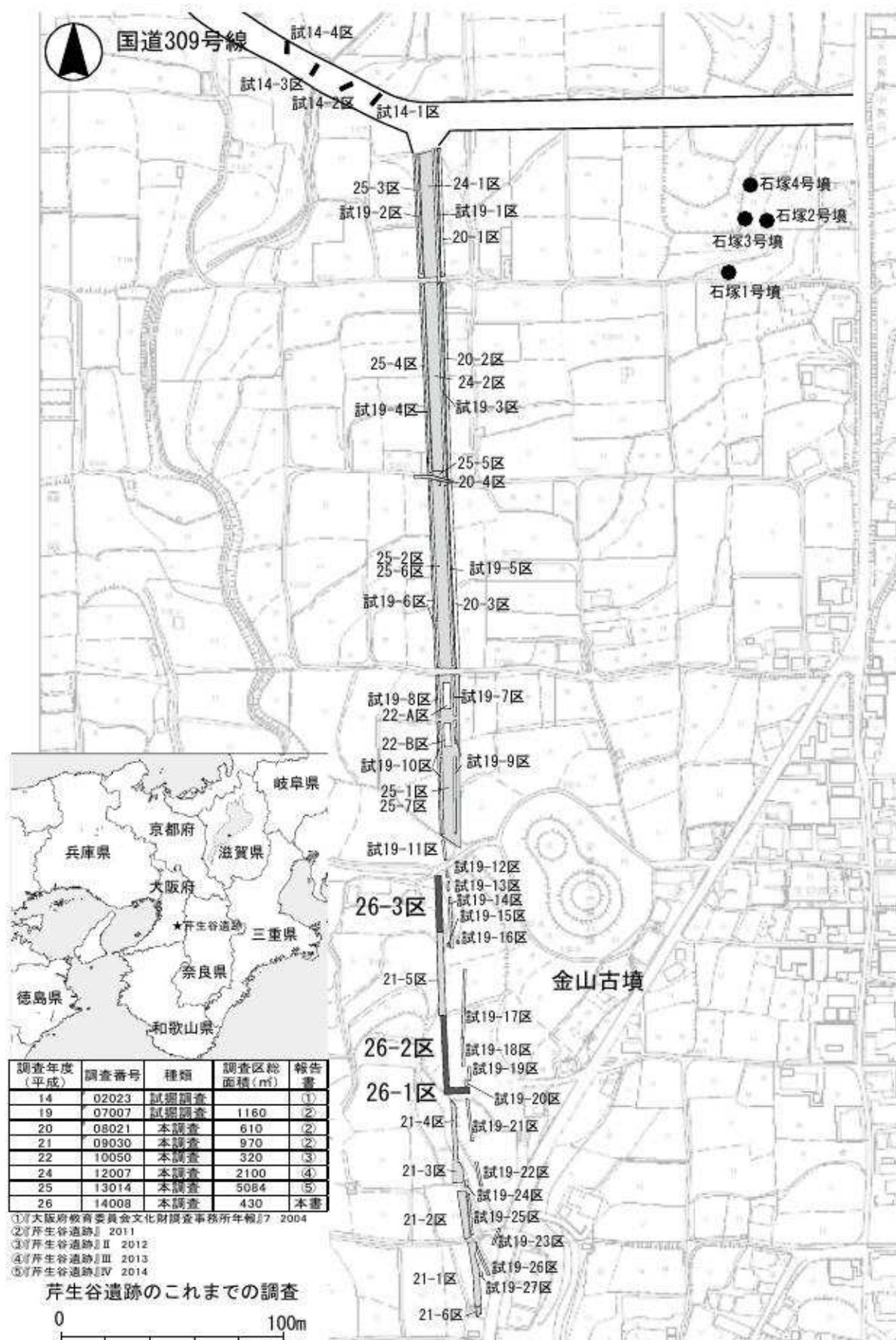


図2 調査区位置図

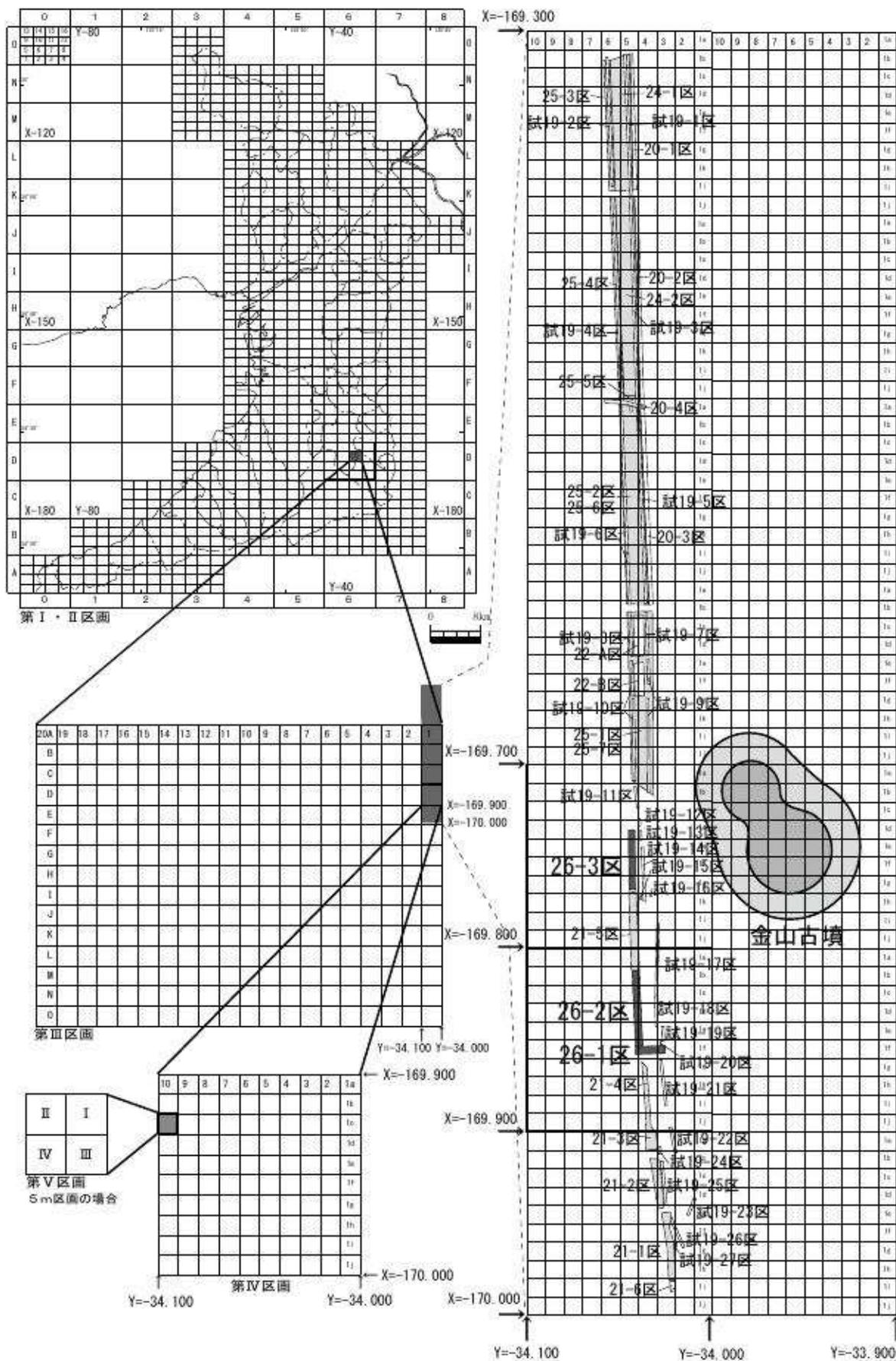


図3 調査区地区割図

本文中の北は座標北を示す。水準は東京湾平均海水面（T. P.）を使用した。遺構面の標高は最も高いところで132 m前後、最も低いところで130.5 m前後である。調査地は、手測量で1/50の遺構図・等高線図を作成した。基準点は以前の調査で使ったGPS測量による三級基準点を利用した。

発掘調査は地表面の旧耕作土を重機で除去し、水田床土を人力掘削、地山面で遺構を検出した。各調査区の地山は水田化に伴い、大半が地山面まで切り土され、低地部に客土、ひな壇造成されていた。

出土遺物の総量は少なく、遺存状況もよくない。コンテナ1箱の土師器・土師質土器・瓦質土器など、在地の土器類が大半である。その他、中世の中国製磁器と、サヌカイト原石が出土している。出土遺物は現地調査と併行して洗浄・注記・実測・復元などをおこなった。その後、出土遺物は委託写真撮影を行った。

また、本書を刊行するにあたり、遺構・遺物図面の浄書をデジタル図化し、省力化をはかった。アドビシステムのイラストレータCS4による。

第4節 層序

芦生谷遺跡周辺はもともと水田が広がっていた。今回調査区も深さ約0.2 mの水田耕作土を除去すると、遺物を包含する水田床土があり、その直下が地山であることが確認できていた。水田は永年の耕作によって、徐々に小規模な区画が統合されていったようで、水田床土が2、3層に分けられる部分もある。

地山は花崗岩や安山岩などの礫や砂利を含む茶褐色の粘質土で、洪積段丘の上面にあたる。試掘調査を含むこれまでの調査では、この中からは旧石器時代の遺物などは確認されていない。

これまでの調査で、遺構は地山に掘削されたものを検出した。したがって、古い遺構の上面は永年の耕作で削平の激しいところが多い。水田床土に含まれる須恵器・土師器などの遺物も、粉碎されたものが多く、磨滅が激しく、遺存状況は悪い。また、多くの地区で古墳時代の土器片・中～近世の土器片が混在して発見された。大半の遺物は二次堆積で、遺構に伴う遺物はわずかだった。

基本層序は、表土・水田耕土が黒褐土、遺物包含層である水田床土が淡灰粗砂・暗褐土・灰褐土・茶褐土など、地山が礫混じりの黄褐粘土や茶褐粘土である。これまでの試掘調査などでおおよそ、土層の堆積状況は確認されており、層序は先の調査に倣った。各区とも水田耕土は5YR2/1黒褐色(①)で、地山は10YR7/8黄橙色(③)に対応する。遺物包含層である水田床土は10YR6/1・10YR4/1などの褐灰色である。

地山は概して南が高く、北が低い。さらに、調査区の南端は深い谷となる。ひな壇状の水田は緩やかに傾斜する斜面地の北側を削って南側に客土し、平坦面をつくりだす。したがって、地山を削った部分は、包含層がなく、遺構も削平されている。逆に、客土された部分は遺構が残され、遺物包含層が0.3～0.8 m程度ある。

遺物包含層である水田床土はいくつかに分層でき、層境で遺構面の有無を確かめながら人力掘削したが、層境に顕著な遺構はなかった。詳細については各区に記すが、これまでの調査報告でも細かく検討されており、準拠した。

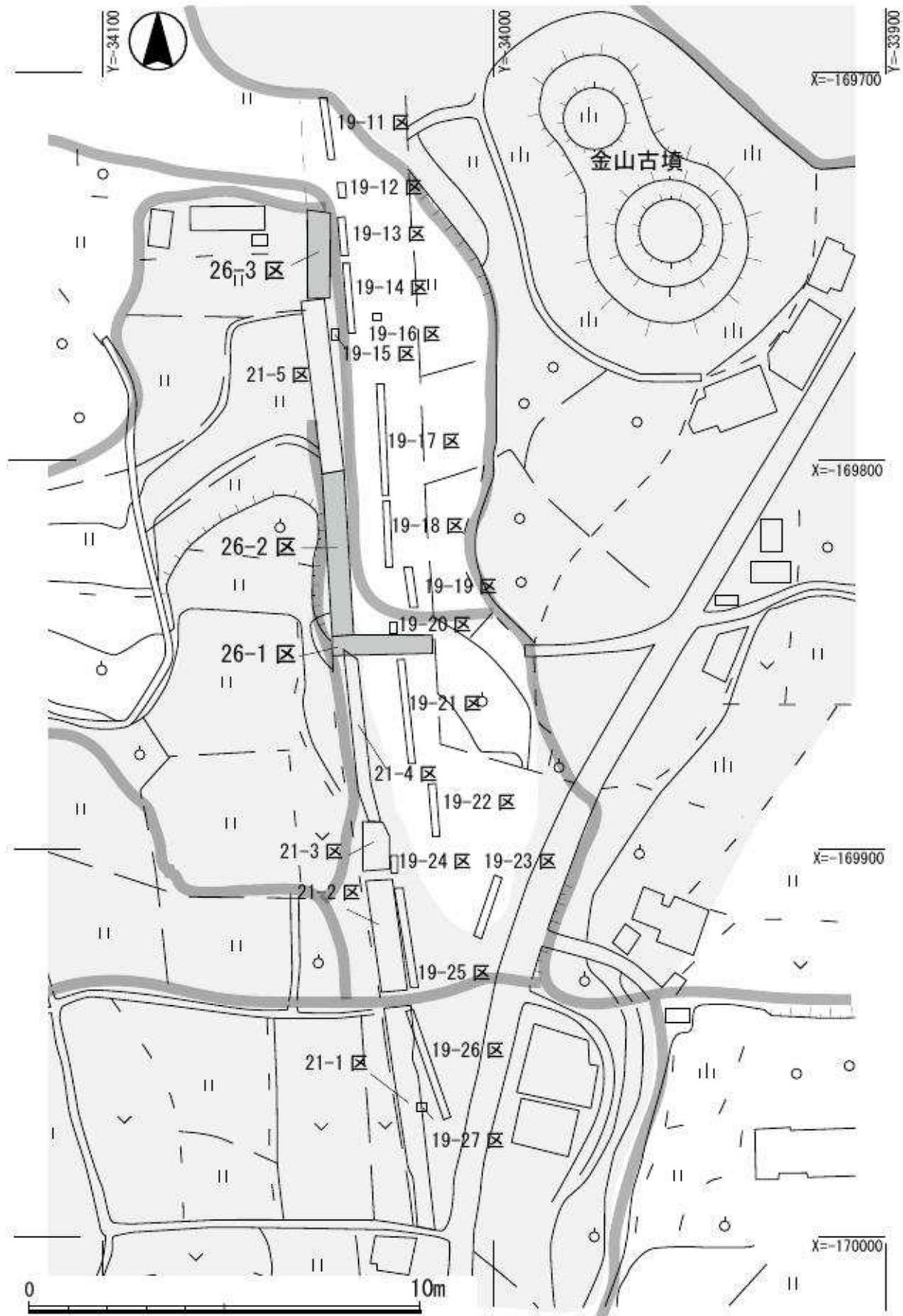


図4 調査区と段丘・水路

第Ⅱ章 調査成果

第1節 26-1区の調査

26-1区は金山古墳の南西約80mに位置する。金山古墳の西側、南北にのびる谷の最深部にあたる。調査区は東西約20m、南北約5mである。南側は21-4区、北側は26-2区に接する(図5)。

調査区は近年まで水田となっていた。表土は約30cm、厚い水田耕土で一部は沼状の植物堆積があった。その下層は粘土層と粗砂層の互層堆積があり、谷の埋没過程を知るものである。堆積は西が薄く、東に厚くなるが、谷の最深部は調査区外になると思われる。

地表下約1mのところで、三条の暗渠があらわれた。この暗渠は礫で満たされており、一部は青竹を破碎したものも含まれていた。三条の暗渠の形成は新しく、この地が水田化していく時期は戦後だと考える。

調査区の地山はさらに深くなると思われ、東端で機械掘削により、確認調査を行った。その結果、地表下約1.5mで地山礫層を確認した。その上面はやはり、粘土層と粗砂層の互層堆積で、遺構は確認できなかった。谷の最深部に自然河川、あるいは古代にさかのぼる水田用水路があったと思われるが、調査区内に流水を伴う砂層などは確認できなかった。

出土遺物はほとんどなく、水田床土に近世・近代の陶磁器片が少量含まれていた。

第2節 26-2区の調査

26-2区は26-1区と南側を接し、金山古墳の南西約70mに位置する(図5)。金山古墳と谷を挟んだ斜面にあたる。北側は21-5区と接する。調査区は南北約40m、東西約5mである。調査区の東側に接して、現在も使われている水田用水路が南北に走る。この水路は千早川に起源をもち、地元で大鳥水路と呼ばれるものである。ただし、調査区ではこの水路に伴う流水堆積物は確認できなかった。もともとの水路は現在よりも東側にあり、近年、付け替えられていることが確認できた。

調査区は近年まで水田となっていた。表土は約20cm、水田耕土である。その下層は粘土層と粗砂層の互層堆積があり、西側上面から滑り落ちた土の堆積である。堆積は西が薄く、東に厚くなる。

調査区の南半分は粘土層の堆積が厚く、最下層は礫まじりであった。これは軟弱な地盤を礫で安定させたものと思われ、26-1区の暗渠に通じるものかもしれない。一部には青竹を破碎したものも含まれていた。この粘土層の形成は新しく、この地が水田化していく時期は26-1区同様、戦後だろう。

調査区の北半分は、地山を段々に切り崩して、小規模な水田を形成していた。地山面に二条の南北溝を確認した。暗渠と思われる。

調査区の北端に井戸があった。井戸の埋め土は現代の耕作土と共通する黒褐土で、深さは約30cmであった。出土遺物はなく、肥だめか、水ためだと考える。

26-2区の出土遺物はほとんどなく、水田耕土・床土に近世・近代の陶磁器片が少量含まれていたのみである(図5)。調査区東側の水路の土留めに近世以降と思われる引き臼の破片がみられた。

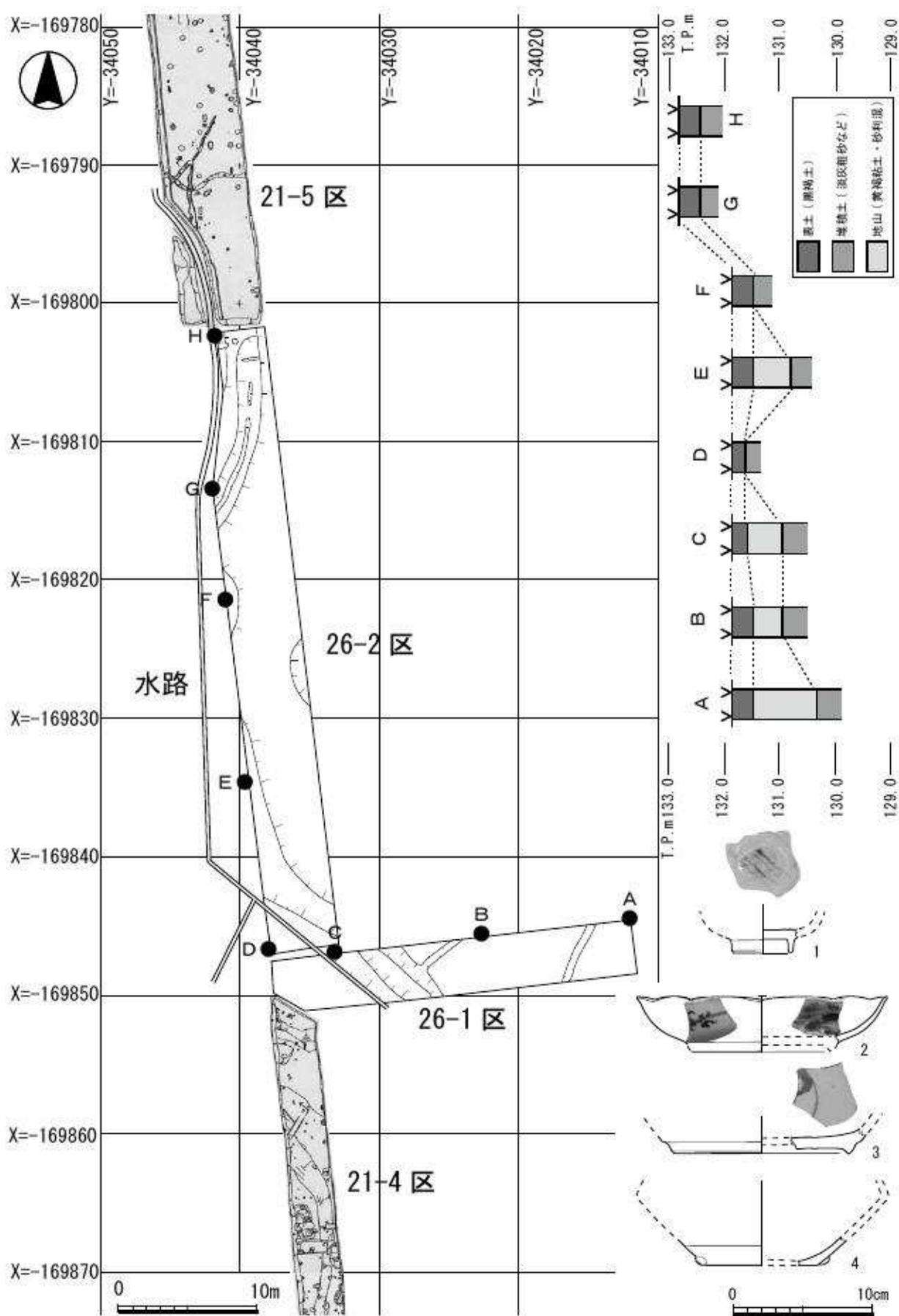


図5 26-1区・26-2区

第3節 26-3区の調査

26-3区は21-5区と南側を接し、金山古墳の西約50mに位置する(図6)。金山古墳と谷を挟んだ西側の台地上にある。調査区は南北に長く、南北約25m、東西約5mである。調査区の北側に接して、現在も使われている水田用水路が東西に走る。この水路は千早川に起源をもち、地元で大島水路と呼ばれるものである。ただし、調査区ではこの水路に伴う流水堆積物は確認できなかった。

調査区は近年まで畑となっていた。表土は約10cmの耕土である。その下層は地山で、遺物包含層はほとんどなかった。概して、南側が高く、北側が低くなる。調査区北半分は斜面を二段にひな壇造成している。ひな壇の端部にのみ包含層が形成され、そのなかに少量の中世の遺物が包含されていた。したがって、もともとの斜面地に中世の遺構があったと思われる。

調査区の南半分は表土下に礫混じりの地山があり、遺構はなかった。21-5区の北端にはいくつかの耕作溝が確認されている。これらも比較的新しい時期に形成されたものだろう。調査区の北端は、急峻に低くなり、谷の斜面となる。堆積土は青灰粘土で遺物は見られなかった。

26-3区の出土遺物も多くなく、表土に近世・近代の陶磁器片、表土下の暗褐色土に中世の瓦器・土師器が少量含まれていたのみである。

第4節 出土遺物

芹生谷遺跡のこれまでの調査でも、遺構面の削平がはなはだしく高密度に遺物は残されていない。今回の26-1区・26-2区は谷の堆積土であったが、遺物はほとんど包含していなかった。

出土遺物はサヌカイト原石、飛鳥時代の須恵器、中世の瓦器・土師器・白磁・青磁、近世の陶磁器がある。

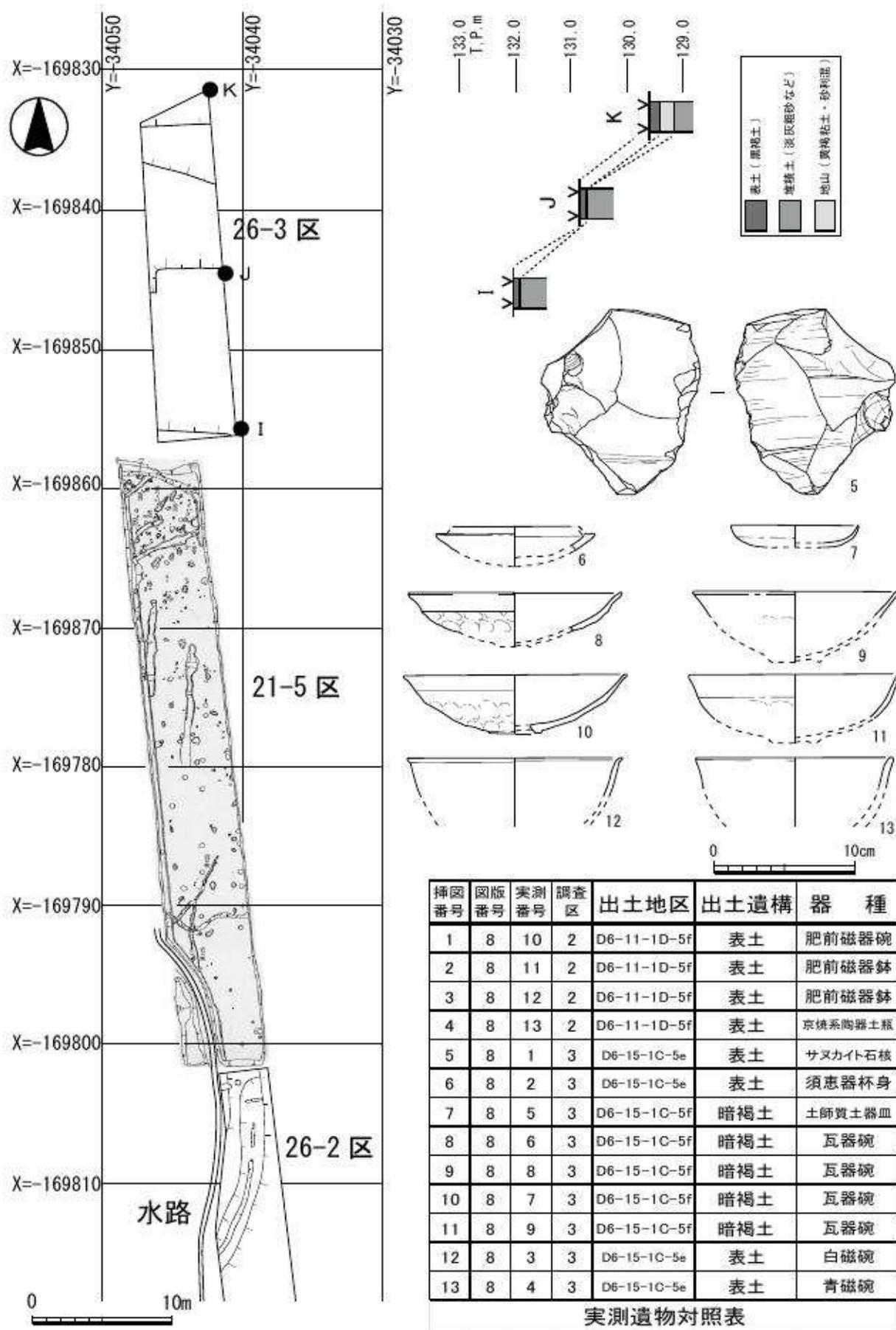
サヌカイト原石は最大長13.2cm、最大幅11.3cm、厚さ3.5cmを測る(1)。四周を磨滅し、新しい割れ口が目立つ。表面は乳白色に風化する。26-3区の表土から発見された(図6)。

飛鳥時代の須恵器は杯身の小片で、口径や高さは分からない(2)。焼成はよく、1mm大の川砂を胎土に含む。26-3区の表土から発見された(図6)。

中世の瓦器には碗・皿がある。いずれも小片である。碗は口径15cm前後で、内面に粗い暗紋が、外面に指押えがある(6-9)。高台は粘土紐で簡素な輪を張り付けるもので、鎌倉時代後期のものだろう。いずれも、26-3区の暗褐色土から発見された。土師質土器皿は口径約9cm、高さ1.6cmを測る(5)。明るい褐色で在地の胎土だろう。外面は無調整で端部のみ横なです。内面は丁寧になで仕上げし、口縁端部はとがり気味である。26-3区の暗褐色土から発見された(図6)。

白磁は碗の口縁部小片のみで、口径や高さは不明である(4)。つややかな灰白色で、口縁端部を外側に折り曲げる。玉縁状に肥大化させる形態ではない。平安時代末頃の福建省閩南沿岸窯系のものか。26-3区周辺で採集した。青磁も碗の口縁部の小片で口径や高さは不明である(3)。暗青緑色で、口縁端部は丸く仕上げる。福建省同安窯のものか。26-3区周辺で採集した(図6)。

近世遺物は肥前磁器の碗・鉢、京焼系陶器の土瓶などがある(図5)。肥前磁器の碗は底部の小片で、底部内面を釉はぎした後、アルミナを塗布する(10)。見込みに格子目紋を施す。鉢は花弁状に口縁部に切れ込みを入れるものと底部の小片がある(11・12)。前者は内外面を唐草紋で飾る。京焼系陶器の土瓶は底部の小片で粘土粒による脚は器体を持ち上げず、痕跡器官である(13)。内面は鉄釉、外面は釉を削り、外面は煤ける。



| 挿図 番号 | 図版 番号 | 実測 番号 | 調査 区 | 出土地区 | 出土遺構 | 器 種 |
|----------|----------|----------|---------|-------------|------|---------|
| 1 | 8 | 10 | 2 | D6-11-1D-5f | 表土 | 肥前磁器碗 |
| 2 | 8 | 11 | 2 | D6-11-1D-5f | 表土 | 肥前磁器鉢 |
| 3 | 8 | 12 | 2 | D6-11-1D-5f | 表土 | 肥前磁器鉢 |
| 4 | 8 | 13 | 2 | D6-11-1D-5f | 表土 | 京焼系陶器土瓶 |
| 5 | 8 | 1 | 3 | D6-15-1C-5e | 表土 | サヌカイ石核 |
| 6 | 8 | 2 | 3 | D6-15-1C-5e | 表土 | 須恵器杯身 |
| 7 | 8 | 5 | 3 | D6-15-1C-5f | 暗褐色土 | 土師質土器皿 |
| 8 | 8 | 6 | 3 | D6-15-1C-5f | 暗褐色土 | 瓦器碗 |
| 9 | 8 | 8 | 3 | D6-15-1C-5f | 暗褐色土 | 瓦器碗 |
| 10 | 8 | 7 | 3 | D6-15-1C-5f | 暗褐色土 | 瓦器碗 |
| 11 | 8 | 9 | 3 | D6-15-1C-5f | 暗褐色土 | 瓦器碗 |
| 12 | 8 | 3 | 3 | D6-15-1C-5e | 表土 | 白磁碗 |
| 13 | 8 | 4 | 3 | D6-15-1C-5e | 表土 | 青磁碗 |

実測遺物対照表

図6 26-3区

第三章 まとめ

今回調査では顕著な遺構は検出されなかった。遺物は1区ではほとんどなく、2区では近世・近代の陶磁器が少量あるのみだった。3区のみ、遺物包含層に中世の瓦器碗・土師質土器がみとめられ、集落の辺縁を示すと思われる(図5・6)。

調査区は金山古墳の西側、谷部にあたる。北側にある25-2区の調査では、飛鳥時代初頭の土器を含む溝2-2が発見された(図7)。この溝は地形に沿ったものだが、その近くに条里制地割に沿った南北水路の溝2-1が営まれ、近年まで農業用水路として使われていた。水路の底には中世から近代までの遺物が含まれた。また、溝2-1の上面には戦後にU字ブロックを並べた水路が設置され、現在に至っても同じ位置にコンクリートの水路がつくられ、受け継がれている。

このような現代の農業用水路が今回調査区の東西にあり、その古段階のものが発掘されると期待された(図4)。結果的に、水路遺構は調査区内で確認できなかった。谷筋に沿って形成されていたとすれば、金山古墳のすぐ東側にあるのだろうか。

さて、飛鳥時代にさかのぼることが確認された溝2-2は、『日本書紀』や『住吉大社神代記』に記された感玖大溝の一部かもしれないと推定し、『芹生谷遺跡』IVで検討した。この場合、「感玖」を感古神社(かんこじんじゃ)や寛弘寺(かんこうじ)のある石川郡紺口郷周辺にもとめ、西側は千早川(東条川)まで、北流しても梅川と石川の合流部までの水田用水としなければならない。

『日本書紀』仁徳十四年条は「・・・また、大溝(おおうなて)を感玖(こむく)に掘る。すなわち石河(いしかわ)の水を引きて上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦、四处の郊原をうるおし、四万頃(しろ)の田を得たり。かれ、そのところの百姓、ゆたかににぎわいて、凶作のうれひなし・・・」と記す。そして、『住吉大社神代記』は「・・・また、難波高津宮にあめのしたしろしめしし天皇にさととして、大神ののりたまわく、大嶋守をもって紺口溝(こむくのうなて)を掘らしめよ、と。同じく水を流して上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦四处の郊原につけて、四万頃の田を開墾する。既にしてつくり、田こえうるおう。かれ、その地の百姓、作り食らうのにぎわいのよろこびありて、凶年のうれひなし。石川・針魚河の水を大神の御田に引きそそぐ。縁(ことのもと)はこれなり・・・針魚、この河を通はし、今に絶えず、往来(ゆきき)となす・・・」という記事による。二つの記事はほぼ同じ内容であり、感玖大溝と紺口溝が同一と伝える。

『住吉大社神代記』には紺口溝の開発主体を「大嶋守」とする。芹生谷遺跡周辺の水路は現在も「大島水路」と呼ばれており、古い伝えが連綿と呼びならわされている可能性がある。「大島水路」の起点は、千早赤阪村水分の建水分神社(たけみくまりじんじゃ)の東側、自然石を組んだ「大嶋井堰」である。この井堰は水越川の水をせき上げて水路となり、水分・川野辺・森屋の三村界が接する地点を北流する。この地点では水路を「冷水水路」(ひやみずすいろ)と呼ぶようだ。ここから、森屋・芹生谷・中村の村界をとおり、さらに神山(こやま)・中村の村界をとおり、寛弘寺・今堂の村界へと続き、今堂で東条川からせき上げた、当地で「畑田水路」と呼ばれる水路と合流する。水路は多くの村の境なることから重要な共同水路だったことがうかがえる。その下流は、寺田・山城・一須賀へと河南台地の辺縁部まで毛

細血管のように水路を分岐させて、石川に流入する。

以上の水路の途中にあたる、千早赤阪村川野辺遺跡と河南町河南中学校運動場の調査地点で大溝が発掘されている。そして、芹生谷遺跡25-2区でも確認されたわけである。また、今堂集落の一角には「大溝」という小字が残る。

ところで、「住吉大社神代記」には先に記した通り、「針魚、この河を通はし、今に絶えず、往来(ゆきき)となす。」という記述がある。この記事は水路が単なる農業用の水路ではなく、運河として物資などを往来させていたようにもみえる。このような解釈から、感玖大溝を大規模な人工水路と考え、「古市大溝」と呼ばれる石川左岸の段丘上の大溝と考える意見がある。現在のところ、石川右岸で発掘された溝は物資を運搬できるような大規模なものではなく、その終着点となるような拠点的集落もみつかっていない。今後は河南台地の水路の経路を解明するとともに、その機能についても検討が期待される。



図7 25-2区の溝2-2

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|------------------|--|------------------------------|------|--|-------------------|-------------------------------|----------|----------------|
| ふりがな | せるたにいせき ご | | | | | | | |
| 書名 | 芹生谷遺跡 V | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 大阪府埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2015-1 | | | | | | | |
| 編集著者名 | 西川寿勝 | | | | | | | |
| 編集機関 | 大阪府教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL. 06-6941-0351 (代表) | | | | | | | |
| 発行年月日 | 平成27年10月30日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査 面積 | 調査 原因 |
| せうたにいせき 芹生谷遺跡 | おおさかふかふかわちぐん 大阪府南河内郡 かなんしうせうたになか 河南町芹生谷、中 | 市町村 | 遺跡番号 | 〇〇° 〇〇′ 〇〇″ | 〇〇° 〇〇′ 〇〇″ | 平成26年12月1日 \ 平成27年1月30日 | 430㎡ | 記録 保存 調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 芹生谷遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 古墳時代後期 中世 | | サヌカイト剥片 土師器 中国製磁器・土師質 土器・瓦質土器 | | | | |
| 要約 | 史跡金山古墳の西側、谷部分の旧地形を確認した。 現在の谷には南北に水田用水路が縦貫するものの、この水路の開始時期や旧流路を、 調査区内では確認できなかった。 | | | | | | | |

大阪府埋蔵文化財調査報告2015-1

芹生谷遺跡 V

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成27年10月30日

印刷 株式会社 近畿印刷センター
〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号

図 版



金山古墳と道路予定地



調査区周辺（平成21年度撮影）



調査区と金山古墳



1区全景（北東から）



1区全景（南西から）



1区全景（北から）



1区全景（北から）



2区全景 (南から)



2区全景 (北東から)



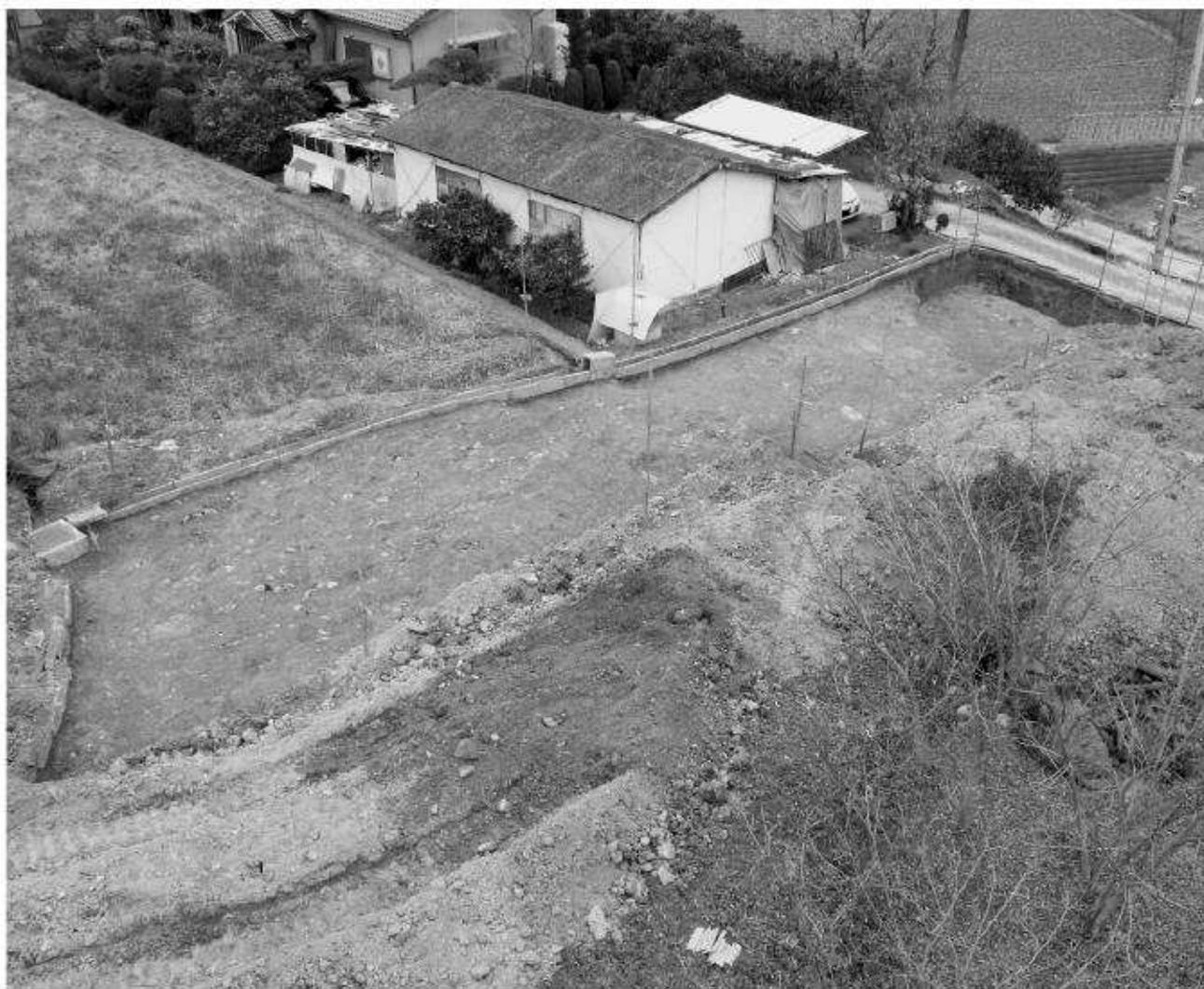
2区全景 (北から)



2区全景 (南西から)



3区全景（北から）



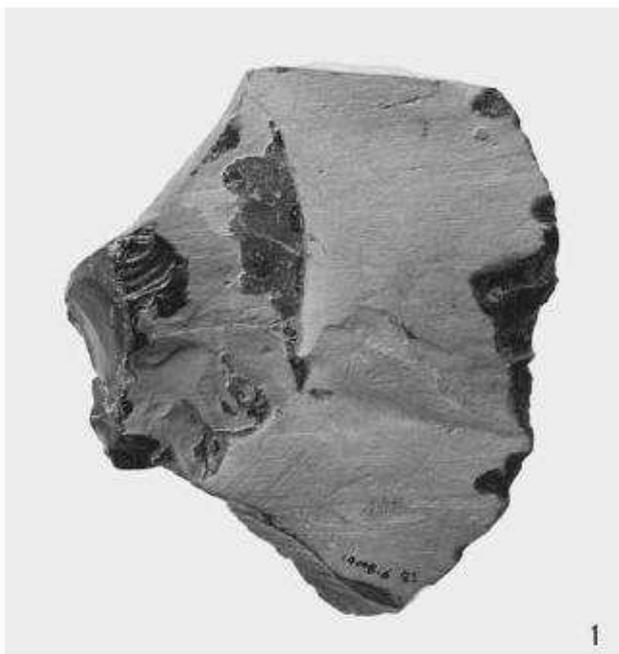
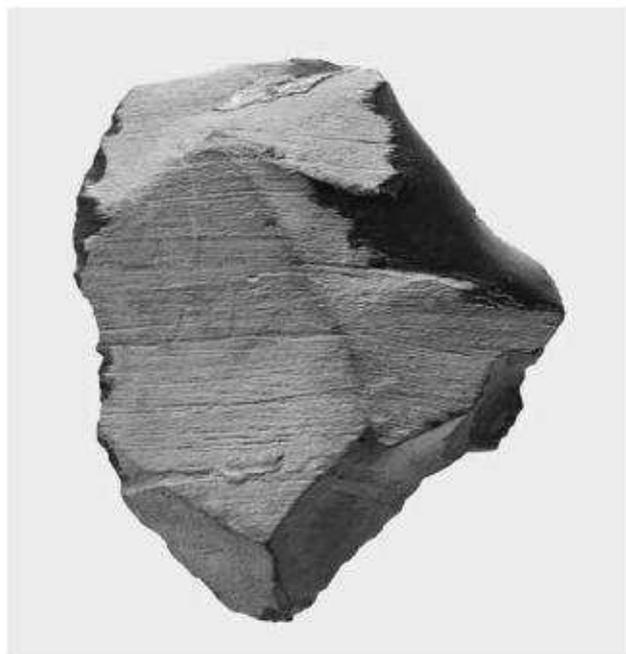
3区全景（南東から）



3区全景 (南西から)



3区全景 (南から)



1

